

中村正直の生涯：留学願書を軸として

遠藤, 道子 / ENDO, Michiko

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

104

(終了ページ / End Page)

110

(発行年 / Year)

1966-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011767>

中村正直の生涯

——留学願書を軸として——

遠藤道子

一

「明治の漢学者で新思想の紹介者。幼少にして漢学を学びかたわら桂川国興について蘭学を学んだ。のちに英語を習得し、慶応二年（一八六六）幕府留学生取締としてイギリスに渡り帰国してからは、女子教育、盲啞教育につくした。また数々の訳述書を以って青年層に新思想を普及し、自由民権運動の一礎となった」

台東区谷中天王寺墓地内「中村正直之墓」の前にこの立札がたっている。⁽¹⁾ わずか一四〇字の中に彼の生涯はなんと簡潔にまとめられていることか。生前「江戸川の聖人」「三田聖人」として福沢諭吉と並び称せられた彼も時の流れの中で多くの人に忘れられひっそりとこの墓に眠っている。しかし中村正直の生涯、その思想、活動は、今日なお研究に値いすべきものがあるのではないだ

ろうか。

これまでの中村正直研究を伝記・文学・思想・教育・宗教の五つの分野にわけて考えてみよう。まず伝記については明治四十年石井研堂によってまとめられた「^{自助的人}物典型 中村正直伝」がある。これは正直歿後十六年、夫人高橋氏の歿後二年目に出版されたもので豊富な資料に基づき誕生から晩年まで年代を追ってかなり詳しくかかれていいる。それは生前正直自身が書いた自伝「⁽²⁾自叙千字文」によって事実においては間違いないものとされるが正直の思想、キリスト教との関係においては不十分な点が多い。これは筆者の思想、宗教的立場によるものであろう。その後いくつかの小伝が出ているが殆んど石井研堂によるものでその域を出ない。中村正直は道德実践家であった。言行一致の精神をつらぬこうとした彼であったためにこれらの多くの伝記では、聖者としての彼を強調することによって自分の信ずるところを堂々と発言、行動し

た彼の姿が浮び上らない。福沢諭吉をもつて活の人、中村正直をもつて平の人とする見方がある。⁽³⁾しかし彼の生涯でもっとも評価すべきものは活の人としてである。それはキリスト教禁令下の明治五年に「擬泰西人上書」をかき、西欧文明の根源をキリスト教にあるとして、その枝葉をとり入れ根本のキリスト教を禁止する矛盾をついた彼であり、「征韓論」に対して「何物唱征韓 非愚則狂耳」我欲曉人 使自知其否 敵小不可侮 古人謀猶 勿利隣国難⁽⁴⁾をかけた彼であった。

文学においては「近代文学研究叢書」(第一卷)⁽⁵⁾に多くの文献があげられているが中村正直の文学論としてまとまったものは見当らない。明治七年より十五年まで彼が「同人社」より出版した文学雑誌と銘うつ文学・教育・思想・歴史等多方面にわたる「同人社文学雑誌」を、それ自体また文学史の上で検討してみる必要がある。また彼はたくさんの漢詩、漢文集をかいている。彼の東京大学での講義は漢学、支那哲学であった。⁽⁶⁾学問としてもっとも造詣が深かったのは漢学であらう。それは彼の蔵書三万冊余の殆んどが漢籍であること、⁽⁷⁾聖堂の儒者であったことから察しられる。これは文学よりも思想の分野になるかもしれないが、これらの研究がないことは、明治維新後日本において学問思想のあらゆる分野で西欧より学ぶことが多くなり、漢学が衰微してゆく中で当然であったかもしれない。この面での研究があれば正直の異なった見方もまた生まれるかもしれない。彼自身西欧一辺倒となる社会風潮の中で、明治八年「支那不可侮論」を明六雑誌に書き

再び十八年「漢学不可廢論」⁽⁸⁾を書いている。

思想の面では吉野作造が正直に深い関心をよせ、彼の蔵書の中に正直の訳述書・文集・文献等が殆んど集められている。⁽⁹⁾論文としては「維新前後の国際協調主義者」⁽¹⁰⁾がある。彼は一あの時代斯くまで西洋文明の真諦に根深く眼光を放射したものは、先生の外にあまりない。此点に於て先生の如きは、明治初年の文化開発の先達中最も優れた一人と謂わなければならぬ⁽¹¹⁾といっている。戦後の論文としては、高橋昌郎の「明治初期における平和思想」――中村敬宇を通じてみたる――新見吉治の「中村正直の世界平和論」⁽¹²⁾(特集明治史の諸問題)⁽¹³⁾がある。今後の課題として、日本の思想史の上で、正直が受けついだものとはなにか、正直から出發するもの、正直の思想が日本近代化をめぐる問題の中でどこに位置づけられるのか、文明開化政策が上からの啓蒙主義であり、自由民権の運動が上からの近代化に対する下からの運動であるとすれば、彼は明治絶対主義政府へ協力を目的とした上からの参加者だったともいえないし、また自由民権論者達へ影響を与えたとしても彼らの仲間でもなかった。彼の思想はまた外からのという欧化思想型、外に対してという国粹思想型という発想型式からみるとどちらの系列にも共通点をもちながらそのどちらにもぞくさない。

教育においては、東大で正直の講義を受けた三宅雄二郎、同人社門人渋谷啓蔵の二人が「帝国六大教育家」⁽¹⁴⁾に、井上哲次郎が「教育者としての中村正直」⁽¹⁵⁾を書き、女子教育では「東京女子高等師範学校六十年史」青山なほ「明治女学校の研究」⁽¹⁶⁾などがあり、

また東京都政史料館編集による「東京の女子教育」⁽¹⁷⁾に中村正直が明治十二年に設立した「同人社女学校規則」がある。同年代の多くの女学校に比較しても、その授業内容は突飛ともいえるもので、ミルの経済書、男女同権論、代議政体論他多くの原書講読がある。幼児教育史の上では、日本における幼稚園設立をめぐって欠くことの出来ない人物として、必ず登場する。戦後、高谷道男によって、明治四年、横浜の亜米利加婦人教授所の幼児教育施設のために、正直が書いた生徒募集のためのポスターが紹介され⁽¹⁸⁾て彼の幼児教育への関心の深さがあらためて知らされた。また彼は日本ではじめて「フレーベル理論」を紹介している。正直は教育者として二つの側面を持っていた。一つは、彼の人格そのものが教育者として誠に立派であったこと、もう一つの側面は、教育実践そのものである。女子教育、幼児教育、盲啞教育のための場をつくりその基礎をきずいたことである。これらは統一的に把握されなければならない。また彼は「教育勸語」の草案を書いている。もちろんこれは採用されなかったが、ここに正直の教育思想が集約されているかについては疑問が多い。

最後に宗教においては、第一に「擬泰西人上書」をめぐって、更に明治以後日本に定着したプロテスタントの初期信仰者として、プロテスタント史の上で、特にこの場合は、正直がキリスト教徒として、受洗したかしないか、あるいはその時期をめぐってあるいは最後まで、キリストへの信仰を持ちつづけていたかが問題とされている。漢学によって教育を受け、儒者としての彼が西欧文明と共にキリスト教を受け入れ、自己の中で両者を統一しな

がら、深い天への信仰をもち、晩年には梵語を学んでいた。彼が最後まで求めつづけたのは何であつたらうか。誠に興味深いものがある。

二

中村正直の生涯を四つに大きく分けてみた。

第一期は、天保三年（一八三二）誕生より十五歳弘化三年（一八四六）までとする。彼の父は百姓より身をおこし三十俵二人扶持という薄祿の武士となった人である。両親は彼の教育に非常に熱心で、公務の合い間に手内職をしてその資を得て三歳より句読、書法を学ばせた。学問によって身をたてさせようと考えたのであろうか。彼はその期待に応えうる利発な子供であつた。六歳にして「法華経」を書写して、大塚本伝寺に奉納し、十歳のおり昌平黉の素読吟味を受けて、学業勉勵の廉により白銀三枚を賞賜されるなどその他数々のエピソードがある。十五歳までの彼は、両親のすすめに従つていわば受け身で勉学に励んだ。

第二期は十六歳桂川国興についてひそかに蘭学をはじめた頃にはじまる。当時の日本の状況を考えれば、彼が外に眼を開いたのは当然のことであらう。しかし幕末の昌平黉寄宿寮で蘭学を学ぶことはどんなに困難であつたらうか。二十二歳に書いた「誓紙」の中に、「一蘭学ノ業半途ニ廢スベカラザル事」の一行がある。⁽¹⁹⁾更に彼は西欧の学問を知る上で英語の必要性を感じ、勝海舟より英漢の辞書を借りて写しとり修得した。また彼は当時佐久間象山とも交流があつた。象山の島国の閉鎖的思考から諸外国の発達した文化をとり入れて、日本の自主的開港によって、国家の発展を

願った開国論に共通なものを持っていたのであろうか。幕府が鎖国の固い殻をはぎとられて、海外の進んだ科学技術を輸入して自己防衛の必要にせまられた時、若い留学生達を送ることを考えた。正直はこの時進んでその取締としてイギリスに留学した。この際は「留学願書」をかいている。この願書はまさに彼の第一・二期の到達点であり、第三・四期への出発点であった。幕府の留学生派遣の目的が、英国の政治、兵制等に亘る基礎的専門學術の修得であったとすれば、彼の求めたものは儒者として形而上の学問であった。すなわち「西洋開化にてハ凡ソの学問を二頂ニ相分ケ申候様ニ承リ申候 性靈の学即形而上の学物質の学^{即形而下の学}」と此二ツ相分申候（中略）是迄相開け居候西洋学ハ物質上の学のみにて性靈の学にいたりてハ未タ十分ニ心得候者有之間敷歟ニ奉存候」日本においては西洋の形而上学が研究されていないことを指摘して、それが益するものであると説き、しかしその学問は「少年生徒の企及ふべき事には無之何レにも洙泗の末流を汲ミ濂洛の遺風を慕ひ候ものニ無之候而ハその是非善惡を熟察し邪正利弊を深究いたし候義ハ罷成事ト奉存候」として自薦している。すでに昌平黉の御儒者となっていた彼が英国への留学を願ひ出るなど、徳川家康の起用によつて、林羅山が聖堂の基いをつくった時代にかえて考えてみれば想像に絶することであろう。この願書に「天の覆ふところ支那一邦にハ限り申間敷地の載するところ支那一邦には限り申間敷」と諸外国に眼をむけていた。この願書によつて選ばれたかは明らかではないが、ともかく彼は若い留学生達と共にイギリスに渡った。留学中の生活について現在殆んど不

中村正直の生涯―留学願書を軸として―（遠藤）

明であるが、彼自身は「自叙千字文」の中に「朝課暮繹 較短角長 錐股懸梁 何暇憶郷」と望郷のいとまさえもなく学んだと言っている。それまでの儒学によつて組み立てられていた学問体系に洋学が加わりそれが混然として、その後の社会的活動、彼の思想体系をつくり出した。石井研堂はこれについて「父は儒学、母は洋学この父母の精華が始めて、一完人を生み出したのである」と書いている。

明治元年幕府崩壊の報をうけて、予定の五年を二年で切り上げて帰国の途についた。幕府滅亡の近いことを予測していたとしても、海を隔てた異国の地で聞いたショックは大きいものであったろう。こうして彼の生涯の第三期が始る。帰国後は、旧主徳川慶喜に従つて、静岡に行き学問所の教授のかたわら「西国立志編」⁽²³⁾「自由之理」⁽²⁴⁾などの翻訳にあたつた。明治の聖典ともいわれた「西国立志編」は、歴史の大転換期に逢ひ人々が方向を見失ひ、新政府が近代国家形成のため人材を必要としていた時代的背景があつて、その真価を発揮したのであろう。序文によればこの書を訳した彼の目的は次のようなものであった。

「余訳是書。客有過而問者。曰。子何不訳兵書余曰。子謂兵強則國頼以治安乎。且謂西國之強由兵乎。是大不然。夫西國之強。由民篤信天道。由民有自主之權。（中略）斯邁爾斯曰。國之強弱。関乎人民之品行。又曰。真實良善。為品行之本。」とかき「自由之理」の序文においては、人間の自由と平等に基礎をおく社会観を示してい

る。明治四年大蔵省翻訳局嘱託として上京した彼は、江戸川のはとりに居をかまへ「同人社」をおこした「明六社」の一員として、啓蒙活動に参加した。「戊辰以来御一新ト言フ。新トハ何ノ謂ゾヤ。幕政ノ旧ヲ去リ王政ノ新ヲ布トイフコトナルベシ。然ラバ政体ノ一新トイフマデニ人民ノ一新シタルニ非ズ。政体ハ水ヲ盛レル器物ノ如シ人民ハ水ノ如シ。円器ニ入レバ円トナリ方器ニ入レバ方トナル。器物変ジ形状ハ換レドモ水ノ質性ハ異ルコトナシ。戊辰以後ニ人民ヲ入レタル器物ハ昔時ヨリ善キ形状ナルベケレドモ人民ハ矢張旧ノ人民ナリ」⁽²⁵⁾

ここに彼が啓蒙活動に参加し、また女子高等師範学校及び付属幼稚園、訓盲啞院の設立に努力した原因がみられる。彼は教育は生まれた時から始めるべきであり、その任にあたるのは女子であるとして女子教育の必要性を考えていた。一国の文明は匹夫の文明に基づき、匹夫の文明はその母の文明によると言っている。⁽²⁶⁾彼の学問への情熱と積極性が「留学願書」となり、留学を通じて得たものが、この期の活動となって花開いたのである。この開花期は、西南戦争までの明治維新という、政治的社会的背景をもったものであろう。

明治十年四十六歳で彼は東京帝国大学文学科嘱託となった。これから彼の第四期がはじまる。それは、彼の生涯にとっていわば「結実期」ともなるべきものであったが、彼の諸活動は次第に消極的な方向へと向かった。社会的にはそのすぐれた学識と人格によって、東京帝国大学教授、東京学士院会員、貴族院議員に勲選されるなど名声を博していった。しかし一般的に歴史的評価を受

くべき実を結ばなかった。彼が一貫してもっていた学問への情熱を失ったのではないことは、個々のケースにおいて明らかであるが、まとまった書物として残すことはしなかった。すでにあげた「自叙千字文」は彼が五十二歳(明治十六年)に書いたものであるが、そのむすびに「願与汝曹 勤読終身」と書いている。

彼はあまりにもきびしい自己への誠実さによって、その結実を洋の東西、民族をこえた宗教に求めようと考えたのかもしれない。

三

中村正直の生涯を「留学願書」を一つの軸として考えてみた。

この願書が発見されるまでは、イギリス留学について「幕府の命による」という見方が一般的であった。しかしこれによって、彼自身が積極的にそれを願っていたのだという事実が明らかになった。その時代と彼の立場を考えれば、この願書はまさに彼の生涯を象徴すべきものと考えられる。すでにのべた通り、それまでの彼の学問への情熱があつたからこそ、この願書が生まれたのである。彼がこの願書が、その後の彼の生活の方向を示したのである。

彼が世を去ってから、二つの世界大戦を経てすでに百年の歲月が流れた。彼が今日語りかけるものはなんであらうか。

一人の人間の密度の高い人生を、わずかな期間の研究で結論づけることは出来ない。これを出発点として、今後なおこの肖像に筆を加え、彼が未来へ指標したものを探し求めたい。

そのために先に指摘した各分野において、一つ一つの問題を明らかにし、それを一つの立体的な像にまとめあげて、歴史の中にその座をあたえることであらう。

【資料】

留学奉願候存寄書付

今度英国江留学之者被差遣候義、一同に御触達に相成候に就而者我義不肖に者候得共、右御人撰中に加ハリ、被地罷越留学仕度奉存候、右之義に就而者、私御儒者相勤居候而外国留学相願候義、不似合之様に申し候族も可有之候得共、是にハ聊か所存有之候義ニ御座候間午恐左ニ奉申上候

一通天地人謂之儒と往古より申伝へ候。天の覆ふところ支那一邦にハ限り申間敷、地の載するところ支那一邦にハ限り申間敷、人の居るところ支那一邦には限り申間敷志かる上へ、儒者の名義を正し候へハ、本邦の学支那の学相心得可申ハ固より当然の事ニ可有之、將又外国の政化風俗を察し、その語言學術□学ひ候迪、儒□職に悖里可申哉、愚考候に是又儒者分内の事ト申し不苦候義□、古へハ、三韓支那の外、御国に通航不致候□。因而純支那の学のミを講求せし事故、儒者と申し候へ共、漢籍に通し候異名の如クに相成候義ト被存候。然ル処今日に到り候而者 日耳曼法蘭西 英吉利 花旗等の文物隆盛學術日進の国、既に御国と和親通商□相成り、公使在住し、人民輻輳する時運ニ御座候上へ、御儒者の中にて一兩人ハ右諸国の政化学術を心得候者御座候而茂不苦義ト奉存候。

一新井筑後守采覧異言の跋ニ御座候大意ハ、外邦人と応接いたし候義、大切の□通事に任せ置べき事ニあらずと□ハ至極名言□(奉存候)。

近頃支那にても、林則徐ハ□の乱後より、英国の文字を学ひ、其後英女王ウィクトリアより送り候書翰上皮の

中村正直の生涯―留学願書を軸として―(遠藤)

字を親ら読ミ候事海国図志に載せ有之、咸豊年中花沙納ハ経筵講官吏部尚書にて稽察会同四訳館を兼任いたし居候義、条約書にも相見ヘ居申し候。いづれも翻訳ハ極而緊要の事ニ而、一字一句も苟もすべからざる事に御座候間、和漢の学に通達仕り候者に無之候而ハ、外国の学問修行候而も、精当の翻訳ハ難成事ト奉存候。

一西洋開化の国にてハ、凡ソの学問を二頂ニ相分ケ申候様ニ承り申候。性靈の学即形而上の学、物質の学即形而下の学と、此二ツニ相分申候。文法の学、論理の学、人倫の学、政事の学、律法の学詩詞楽律絵画楷書の芸、等ハ性靈の学の項下に属シ申候。万物窮理の学、工匠機械の学、精煉点化の学、天文地理の学、本草薬性の学、稼穡、樹芸の学ハ物質の学の項下ニ属シ申候。是迄相開け居候西洋学ハ、物質上の学のミにて、性靈の学にいたりてハ未だ十分ニ心得候者有之間敷敷ニ奉存候。人倫の学、政事の学、律法の学等、彼邦ニて専要と講求致し候義ニ御座候上ハ、御国にても心得居候者、余多無之候而者、御差支之義も生し可申哉。且右等學術相開け候へハ、自然御国益ニ相成可申義ト奉存候。但右等學術にいたり候而ハ、少年生徒の企及ふべき事にハ無之、何レも洙泗の末流を汲ミ、濂洛の遺風を慕ひ候ものに無之候而ハ、その是非善惡を熟察し、邪正利弊を深究いたし候義ハ(不?)罷成事ト奉存候。私義此度留学の御人撰に興り候へハ、不及ながら是等の学問を講求仕度所存ニ御座候。依而□此段奉申上候以上。

(註)

(1) 都旧跡として、東京都が立てたもの。

(2) 磯辺弥一郎「中村敬字先生」書物礼讃大正十四年

- 竹林貫一編「中村正直」(漢学者伝記集成)関書院^{昭和三年}
- 信夫 淳平「江戸川聖人」(反古草紙)有斐閣^{昭和四年}
- 大森金五郎「過渡期の学者伝」(新国史論叢)吉川弘文館^{昭和十一年}
- 他に教育人名辞典(理想社)・キリスト教大事典(教文館)・教育学辞典(平凡社)
- 大人名事典(平凡社)・日本文学大辞典(新潮社) 主なものを挙げれば以上がある。
- (3) 藤原喜代蔵「教育思想学説人物史」(第一卷)東亜政経社^{昭和十八年七五四頁}
- (4) 「敬字詩集」卷之三(磯川集・書感)
- (5) 昭和女子大学近代文学研究室編^{昭和三十一年}
- (6) 「東京帝国大学五十年史」(上冊)^{昭和七年七一八頁}
- (7) 中村正直の蔵書は、静嘉堂に収められている。彼が書いた蔵書目録もあり殆んど散逸していないと思われる。なおここには、彼の日記「敬字日乗」もあるが、これは一部である。また彼の洋書は静嘉堂より成蹊大学に移されている。それらは、人文・自然・社会科学にわたるもの五百八十九冊である。
- (8) 「明六雑誌」三十五号(明治文化全集・雑誌編)
- 「学士院雑誌」(九編ノ四)^{明治十九年}
- (9) 東京大学法学部内に「吉野作造文庫」ありこの中に、現在国会図書館、日比谷図書館などでは見られないもの、中村正直に関するものは殆んど揃っている。
- (10) 「主張と閑談」博文館^{大正十三年}
- (11) (10)に同じ、二〇〇頁
- (12) 「日本歴史」三三号^{昭和二十六年}
- (13) 「歴史教育」5巻 1号^{昭和三十三年}
- (14) 明治の六大教育家として、大木喬任、森有礼、福沢諭吉、新島襄、近藤真琴と共に挙げられている。博文館^{明治四十年}
- (15) 雑誌「教育」^{昭和八年一月号}
- (16) 東京女子大学紀要(第一七号)^{昭和三十一年}
- (17) 「東京都史紀要」(九)^{昭和三十六年}
- (18) 「ドクトル・ヘボン」牧野書店^{昭和二十九年}
- (19) 石井研堂「自助的人中村正直伝」二〇頁より引用。^{物典型}
- (20) この願書は正直が家族に絶対あけてはならないと常々言っていて包みの中に入っていた。平林広人氏が家族立ち会いのもとに開いたところ、明治天皇、皇后の写真、大久保一翁よりの手紙と一緒に発見された。現在は平林氏より、大久保利謙氏を経て国会図書館の金庫に保管されている。平林、大久保両先生の御好意によつて拝借した。
- (21) 原平三「徳川幕府の英国留学生」(幕末留学生の研究)「歴史地理」七九巻五号^{昭和十七年}三六頁
- (22) (19)に同じ二八頁
- (23) スマイルス著 英国を去る時友人より餞別として送られた
- (24) ジョン・スチュアート・ミル著 On Liberty
- (25) 「人民ノ性質ヲ改造スル説」明六雑誌三十号
- (26) (明治文化全集・雑誌編)二〇一頁
- 「敬字文集」巻六